

🐶 おはようございます！久しぶりの校長の話です。聞いてくださってますか？

昔、むかしの話をします。昔の話と言っても、それほど古い話ではありません。日本の時代で言うと、江戸時代から明治・大正時代。中国はその頃「清」しん」と呼ばれていました。その清の時代の「科挙」という難しい試験について、今日、お話しします。

詳しくお話ししていると、一時間あっても足りないので、ごくごく大雑把に説明します。「科挙」の試験の最初は、「童試」と言い、数え年で十四歳以下の人が受けることができます。「童試」は、「県試」「府試」「院試」の三つからなり、なんと、県試は五次試験まで、府試は三次試験まで、院試は四次試験まであります。この三つの試験に合格すると、国の学校に入る資格を得ることができます。

国の学校の生徒のことを「生員」と呼び、生員は「歳試」という試験を受けることを義務づけられ、成績が悪いと学校をやめさせられ、生員の資格を取り上げられます。

ここまででも相当大変そうですが、本番はまだまだこれから。この後「科試」という試験があり、いよいよ「科挙」の本番である「郷試」きようし」「会試」「殿試」と試験が続きます。

郷試や会試を受ける場所は「貢院」といいます。収容人数は二万人を越えます。

貢院には「号舎」と呼ばれる幅一メートルほどの小さな部屋が無数に続いています。号舎を今「部屋」と言いましたが、実は、扉も家具も無く、三方をレンガの壁で仕切り、屋根をつけただけの独房のような空間なのです。地面は土間で、大きな板が三枚置いてあり、これを壁から壁へかけ渡すと、一番高い板は荷物置き場となり、一番低い板が腰掛け。真ん中の板が机という訳です。受験生たちは二泊三日をここで過ごし、答案作成に励みます。旧暦の八月八日に第一回の入場が始まり、十一日に第二回、十四日に第三回試験のため六日。会試も二泊三日の試験が三回続き、殿試は皇帝自らが宮中で行うという建前の、一日限りの試験で、答案は日没までに完成させなければなりませんでした。



さて、ここで、世にも複雑な答案の採点方法にも触れておきましょう。受験生は答案を書くのに、黒の墨以外は使うことを禁止されています。採点に当たり、答案の表紙に書いてある姓名・年齢などの部分をのりで封じて、ただ座席番号のみを残します。筆跡から判断して不正が起これないようにするため、なんと！答案を全部写し取り、審査員に回すことになっています。一回当たり一〜二万通の答

案が三回分。それを片っ端から写しまくる写字係が数千人。写字係は必ず朱筆を使い、朱筆で写しとられた答案は、原本とともに校正係へ回されます。ここにも数百人の係がいて、必ず黄色の墨を使い校正します。校正が終わると、原本は保管。写しは審査員に送られ、彼らは藍色の墨を使いおおよその評価を書き込み、それが主任・副主任の審査員に送られ、最終的に、黒色の墨を使い、合否の採点をすると、恐ろしく手の込んだやり方です。ちなみに科挙の合格率は三千人に一人と言われていました。

東京都の私立小学校は、十一月の一日から試験を開始してよいという決まりになっています。立教小学校でも一日・二日が入学試験です。君たちはお休みとなるので、晴れ晴れとしたルンルン気分でしょうが、受験児は今必死です。三千倍というほどむごい倍率ではないにしても、何年前のあの日、あの時の重苦しい気持ちを思い出してみてください。君たちにあこがれ、君たちの後輩になろうと必死に努力しているチビッ子たちがいることを心の片隅にとめ、活躍を祈り、応援してくれると有難いです。

このハーフタム・ホリデー中、学習が遅れ気味の方はそれを取り返す。余裕ありの方は、日頃できないような五感を使った体験を大いに楽しんで、充実したひと時にしてください。

(立教小学校校長 田代 正行)